ベースボール型ゲームに関する研究
－ソフトボールのルール理解に着目して－

坂井　俊彦（生涯スポーツ学科　学校スポーツコース）
指導教員　森川　みえこ

キーワード：ベースボール型ゲーム　学習指導要領　問題　理解

1.緒言

平成 20 年に小学校の学習指導要領が改訂され、中学年・高学年の「ゲーム及びボール運動」領域において、公式のルールに縛られない教材づくりが可能になり、系統的・段階的な学習内容が可能となった。

しかし、ベースボール型には、「投げる・打つ・捕る」などの技術的な難しさや運動量の低さなどの問題があり、小学校の体育授業でベースボール型を取り扱っていない学校が多くみられる。中川（2006）によると、ベースボール型の取り扱いの現状が一向に好転していない理由として、ベースボール型ゲームに対する理解の不足や誤解から生じているのではないかと考えている。

そこで本研究では、よりベースボール型への理解を深めるために、学校体育におけるベースボール型ゲームの特性やねらい、またベースボール型ゲームが持つ問題とその原因を明らかにし、効果的な教材を考案する際の資料を作成することを目的とする。

2.研究方法

文献研究…以下の文献から情報を集め、情報をまとめながら考察する。

・三和貴道（2010）運動の楽しさや喜びを味わうことができる指導法の研究－ベースボール型ゲームの「わかる・できる・かかわる」の学習活動を通して－

・中川昌和（2006）ベースボール型ゲームの単元構成に関する研究

3.結果と考察

平成 20 年の学習指導要領の改訂には、種目固有の技能ではなく、「型」に共通する動きや技能を系統的に身に付けることを重視するというねらいがある。また、ベースボール型には攻守を規則的に交代し合い、一定の回数内で得点を競い合うという特性がある。

三和（2010）と中川（2006）の研究から考察した結果、ベースボール型ゲームが持つ問題や原因として、「打つ、捕る、投げる」などの技術の難しさ、直接プレイに関係する場面が少なく他のゲームに比べて運動量が少ない、ゲーム中に求められる状況判断の複雑さなど指摘している。これらの問題や原因に対して、ベースボール型が持つ「特性」や「ねらい」を理解した上で、授業づくりを工夫していくことが求められる。

4.結論

「投げる・打つ・捕る」などの技術の難しさにおいて、投げることに関しては、ダイヤモンドを狭くして投げる距離を短くしたり、打つことに関しては、バットの代わりにテニスラケットを用いて、ボールに当たりやすくしたりするなど工夫ができる。また捕球に関しては、年齢によっては体でしかボールを受けられない児童もいるので、ボールを大きくするなどの工夫もできる。このようにルールや用具を工夫した授業づくりをしていかなければいけない。

児童達の実態に合った指導方法としては、身体発達・発育や基礎運動能力の発育過程に起因することを考慮し、学年に合わせた教材を設定していくことが望まれる。

参考文献　・文部科学省（2008）「小学校学習指導要領解説体育編」：1 - 93